

## 座長のまとめ

戸川 清 (秋田大)

本群は鼻過敏症に対する薬剤の鼻内スプレー効果についての臨床的検討と、ネブライザーに用いられる抗生物質溶液の安定性についての基礎的検討からなる。

岩田ら(東邦大)はハウスダストアレルギー患者に対してクロモグリク酸ナトリウム類似作用をもつY-12141(吉富製薬)の鼻内スプレーを行わせ、投与前、1週後、2週後の効果を鼻症状、鼻鏡所見、鼻粘膜誘発反応、一部には気道抵抗とその逆数、機能的残気量などによって追求し、総合判定で有効80%で副作用も鼻内刺激感のみであり、鼻アレルギー治療剤として期待出来ると述べた。斎藤(医歯大)の薬剤に対する質問に「chemical mediator遊離抑制作用に加えて、chemical mediatorに対する生体の感受性を低下させる作用が推察される」との応答がなされた。非ステロイド剤でそれと同等の薬効が示されたことは、大変結構なことである。今後副作用を含めて長期使用の治験報告を期待したい。

斎藤ら(医歯大)は昨年(通年性アレルギーに対するベクロメサゾン鼻内スプレーの影響)の続報の形で血管運動性鼻炎に対する同剤鼻内スプレーの効果を、投薬前、投与中、投与後(追跡期間)における鼻症状(アレルギー日記)、鼻鏡所見、一般臨床検査、血漿コルチゾール濃度測定などより検索し、総合判定で有効80%、中止後少くとも1週間は持続した。認めるべき副作用はなかったと述べた。久松(日大)の鼻アレルギー症例と今回の血管運動性鼻炎症例との臨床差、換言すれば診断基準はとの問いに、厳密に血管運動性鼻炎と診断することはむずかしいが、鼻アレルギー研究班の判定基準によったとした。今野(秋田大)の本剤の作用機序はとの問いに対し、血管運動性鼻炎に対する本剤の奏効機序は不明であるとした。恐らく自律神経過敏性とアレルギーの関連に迫る重要な課題として今後研究が進むであろうことを期待する。鈴木(帝京大)の本剤長期使用時の副作用、効果の変化などについての問いも今後の課題として残された形となった。

本堂ら(名市大)はネブライザーに用いられる抗生物質溶液を温度別に、保存期間ごとに薬液の力価と外観変化を検討し、冷蔵庫内保存(4℃)では20日まで変化はなかったが、20℃以上では力価の経時低下を認めた。これに対し、前川(大阪城北市民)はある種の抗生剤、気管支拡張剤、粘液溶解剤は超音波エアロゾル化により変質・分解し、物によっては有毒ガスを生じるといわれているので、今後この点についても研究を進めて欲しいとのコメントがなされた。日常使用の折にこうした懼れは念頭になかったが、早急な基礎的研究が必要である。冷蔵庫からの出し入れの頻度が薬剤に与える影響については、その可能性はあるが、実験系が立てにくいので未施行とのことであった。本研究の成果は日常診療における抗生物質溶液の取扱いに一つの目安又は基準を与えたことになり、非常に有用である。こうした基礎的研究結果に裏付けられた治療体系の確立が望まれるところである。